

おん が ほりかわ
遠賀堀川の歴史
～宝川と呼ばれた川～



川
ひ
ら
た

2008年3月

遠賀川下流域河川環境教育研究会

おん が ほりかわ
遠賀堀川の歴史
～宝川と呼ばれた川～

はじめに

遠賀川下流域河川環境教育研究会は、「総合学習教育」を行うための情報提供（収集）・人材育成・ネットワークづくりを目的として、平成19年1月に発足しました。

研究会メンバーは、遠賀川下流域の市町を対象とし、中間市、岡垣町、遠賀町、水巻町、芦屋町の小学校の先生及び教育委員会、北九州市、福岡県北九州土木事務所、遠賀川河川事務所の職員で構成し、年間を通じて小学校の「総合学習教育」に適応した活動を行っています。

遠賀川下流域には、歴史的に貴重な「遠賀堀川」があります。しかしながら、遠賀堀川について記載された書物が少ないことから、学習の題材としての取り扱いが困難な状況にありました。

そこで、社会科や「総合学習」の題材として活用できるように、小学生を対象とした副読本を作成することと致しました。

この副読本により、遠賀堀川を造り上げた先人達の苦心や努力を知ることによって、地域への愛着心が育まれ、また、自然環境の大切さを再認識するきっかけとなり、遠賀堀川を未来へ伝えていく一助となれば幸いです。

遠賀川下流域河川環境教育研究会

もくじ

1. 「遠賀堀川」って何だろう？	1
2. 暴れん坊の遠賀川	3
3. 遠賀川の水を分けて、洞海湾に流す計画（福岡藩の堀川工事の計画）	5
4. 遠賀堀川の工事が始まった	6
5. 遠賀堀川の工事の失敗（大膳堀はどうしてできたのか）	7
6. 享保の大ききんと村人たち	8
7. ウンカ退治と村人たち（ウンカを退治する方法を考えだした吉右衛門）	10
8. 再び遠賀堀川の工事が始まった	12
9. 岩山に刻まれた文字（車返の岩山を切り貫いた石工たち）	13
10. 遠賀堀川工事の完成	15
11. 水がきたぞ（堀川が完成した日の村人たち）	16
12. 遠賀堀川が宝川になった（遠賀堀川と人々の暮らし）	17
13. 米や石炭を運ぶ「川ひらた」	18
14. 川ひらたの船頭さんの暮らし	19
15. 遠賀堀川の昔と今、そして未来へ	21

<資料編>

・堀川に関する史跡分布図	24
・堀川筋条目	25
・遠賀堀川の歴史年表	26
・写真等	27

「遠賀堀川」って何だろう？

遠賀堀川は、北九州市の楠橋から中間市と水巻町、八幡西区の折尾を
通って、洞海湾まで続く全長12.1キロメートルの運河、つまり人間が
掘った川です。

近世（およそ400年前）になって、福岡藩は、洪水が続く遠賀川の
堤防の大改修工事とあわせて、遠賀川の水を分けて、洞海湾に流すとい
うとても壮大な計画をたてました。

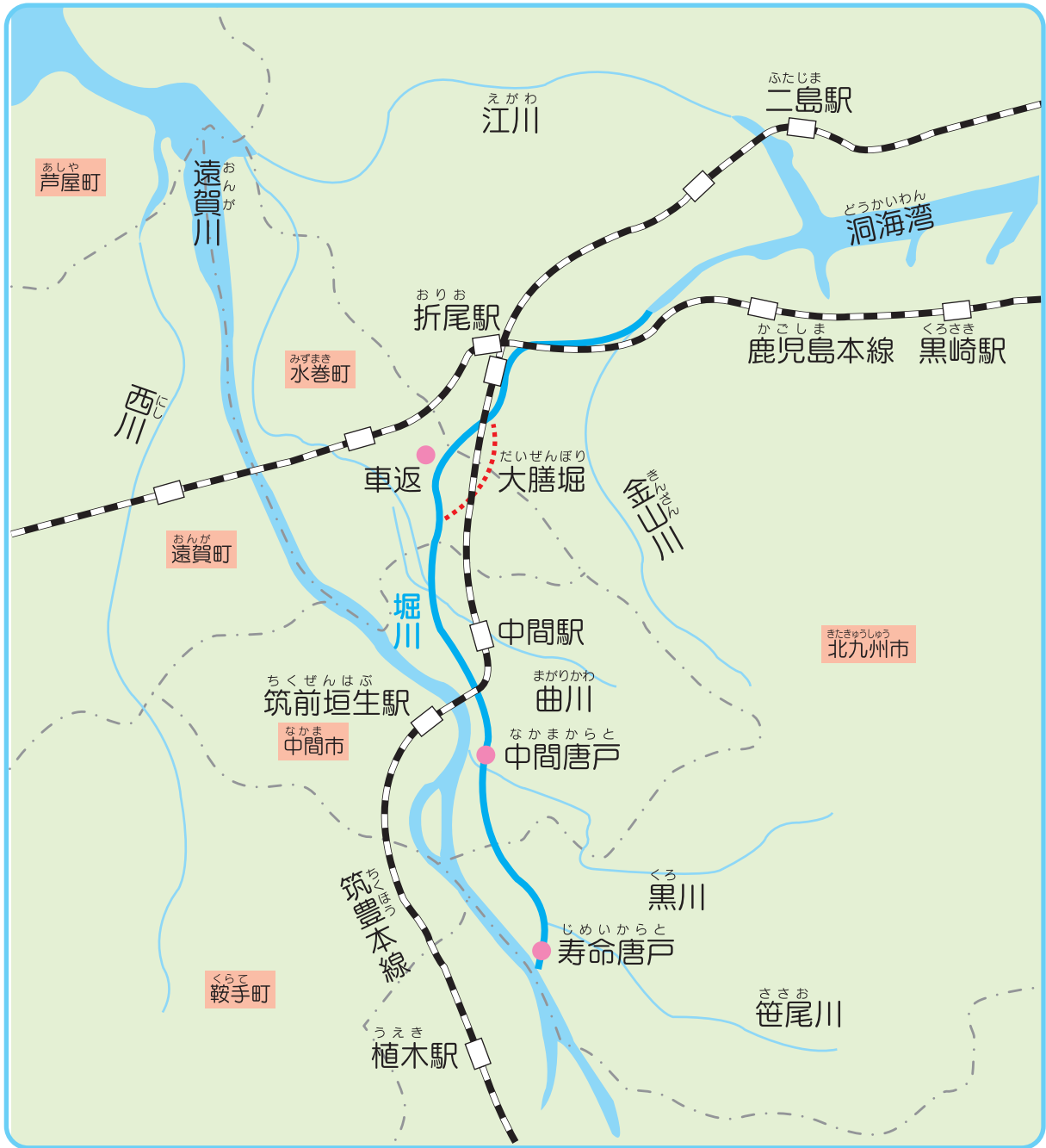
その計画の中で、遠賀堀川は長い年月をかけてつくられたのです。近
世の中ごろ（およそ300年前）からすすんできた遠賀川下流域一帯の
新田開発や洞海湾一帯干拓工事とつながるとても大切な工事でした。遠
賀川の洪水や日照りの害に苦しめられていた遠賀郡一帯の数万人の農民
たちは、福岡藩のこの大工事のために汗水たらして働きました。1804
年、ようやく遠賀堀川の工事は一応完成しました。

当時の人々は、遠賀堀川のことを「宝川」と呼んだといいます。当時、
米作りの用水だけでなく、飲み水や川船による水運にも使われる宝物の
ような川だったからです。



遠賀堀川の車返付近を通る川ひらた<明治中期>

遠賀堀川の位置図



あば
暴れん坊の遠賀川

今から、およそ、400年も前のことです。当時の絵地図をみると遠賀川のように、今とずいぶんちがっていました。遠賀川は、今よりも曲がりくねり、今のような高い、じょうぶな堤防^{ていぼう}はありませんでした。

当時の遠賀川は、中間村^{なかま}の手前で今よりも西側を流れていました。地元では、その旧河道^{きゅうかどう}のことを「古川」と呼び、今でも、当時の堤防の一部が残っています。

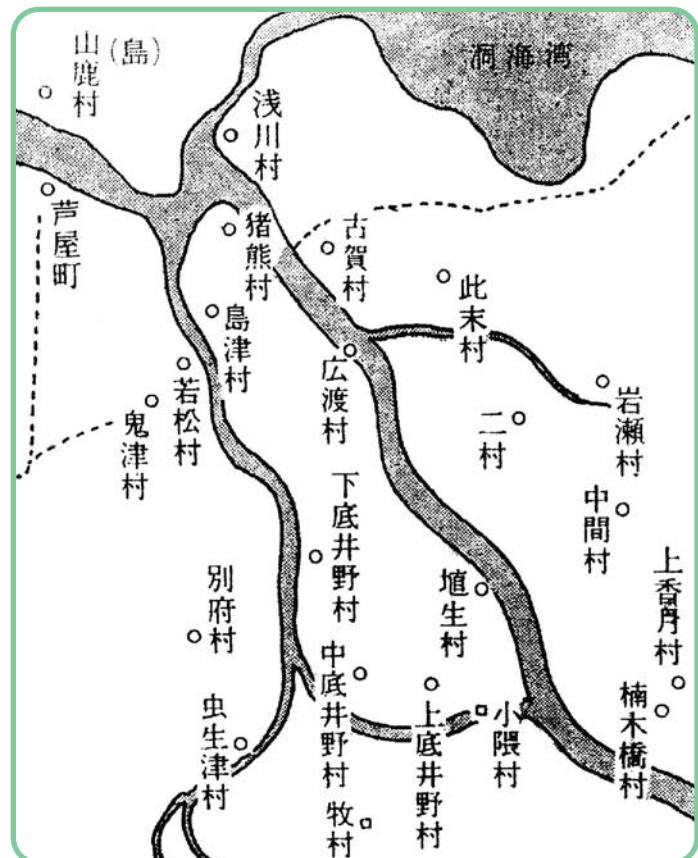
そのうえ、満潮^{まんちょう}（潮が満ちて、海水面が上りきった状態）になると、芦屋^{あしや}の海から、海水が流れ込んでくるので、大雨が続くと、川はすぐにはんらんしてしまいました。

特に、遠賀川河口近くの遠賀地方^{まがりかわ}や曲川沿いの水巻^{みずまき}地方では、川がいつもはんらんして、海のようになり、村々の人々は米作りができず、とても苦しんでいました。

また、反対に日照^{ひで}りが続くと、遠賀川から自由に田畑に水を引くことができず、作物がすぐに枯^かれてしまい、大きな被害^{ひがい}を受けました。

1617年の6月のことです。12日間も大雨^{だいこう}が続き、大洪水^{だいこうすい}がおこったため、遠賀川の河口は、まるで、入海のように水がたまりました。

遠賀郡の中間村^{いわせ}、岩瀬村、二村^{ふた}（今の二・下二・伊左座）^{ふた しもふた いさざ}、吉田村^{よした}、此末^{このすえ}（頃末）村^{ころすえ}、杵村^{えぶり}、古賀村^{こが}では、家、牛や馬、田畑も流されてしまい、



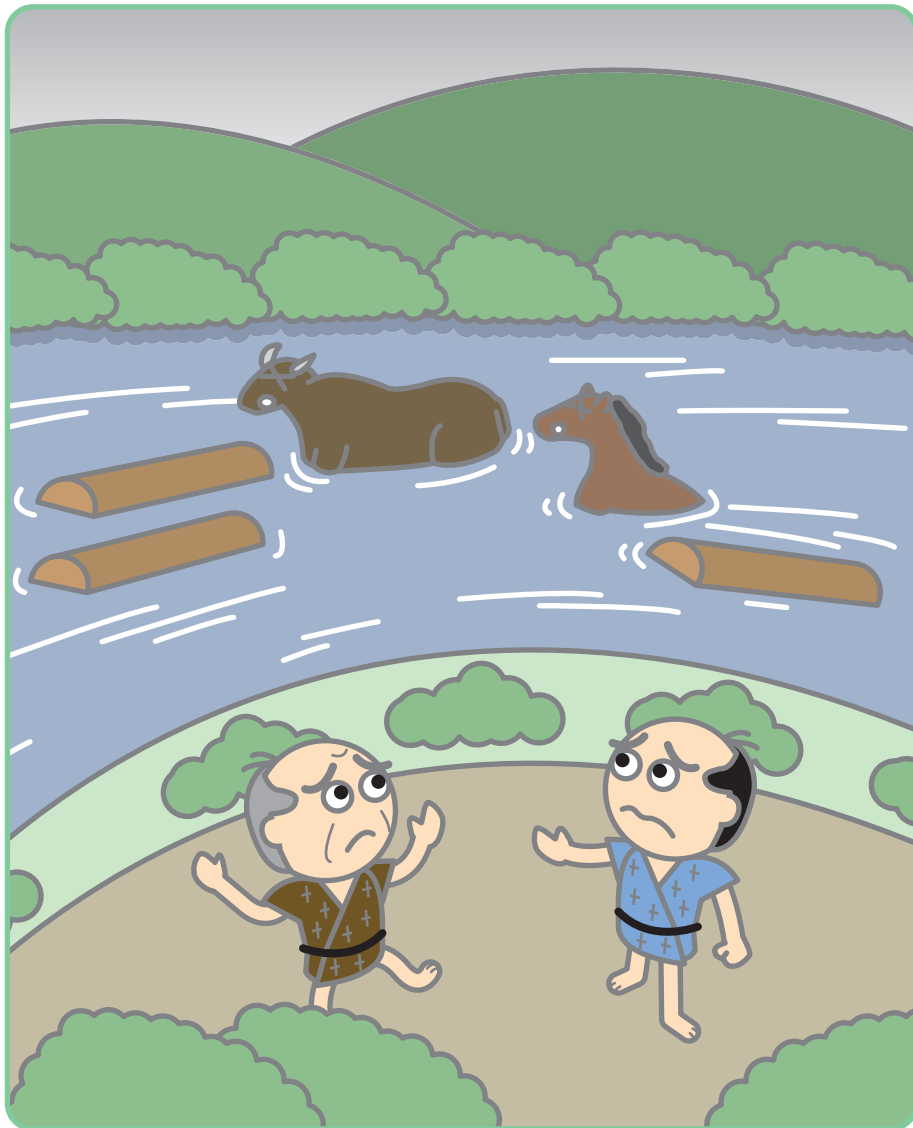
およそ400年前の絵地図（『中間市史上巻』より）

村人は田植えもできないで、飢え死にになってしまう者も出たほどでした。たび重なる洪水に頭を痛めた福岡藩は遠賀川をまっすぐにする工事とじょうぶな堤防をつくる工事をすすめていきました。

この遠賀川を改修する大工事は、遠賀郡からのべ十万人の村人をかりだして行われたといわれています。

1613年から、大改修工事は始まり、15年後にようやく完成しました。

それでも、完成した遠賀川の堤防の高さは、わずか3メートル程度（現在の堤防の約半分の高さ）しかなく、洪水を完全になくすことはできませんでした。



洪水で牛や馬まで流され、困った村人

遠賀川の水を分けて、洞海湾に流す計画

— 福岡藩の「堀川工事」の計画 —

1620年、福岡藩の藩主黒田長政は、家老栗山大膳と遠賀川や中間付近の洪水の被害のようすをみてまわりました。

福岡藩にとって、米どころの遠賀平野は、とても重要な地域でした。

そこで、福岡藩は、遠賀川の洪水被害をくいとめるための工事の計画をたてました。

中間村から、則松村長崎まで、遠賀堀川を掘り、遠賀川の洪水の時の水の勢いと水量をへらす。合わせて、かんがい用水として利用すれば、流域周辺の田畑に水を引くことができる。

それは、まさに一石二鳥の計画でした。福岡藩は年貢の石高をあげたいというおもいもあり、村人たちの願いも洪水や日照りの害をなくして、安心して米作りがしたいということでした。



黒田長政が遠賀郡の洪水のようすを視察（堀川カルタより）

遠賀堀川の工事が始まった

1621年1月14日、遠賀堀川の工事がようやく始まりました。

福岡藩の家老「栗山大膳」が最高責任者となり、その工事の指揮にあたりました。

福岡藩の役人たちは、村々にこれから始まる大工事のために、大勢の村人を夫役（田んぼを作ったり、土木工事をする人）として出すようにきびしく命令しました。

村人たちは、朝まだくというちから、「くわ」をふるい「もっこ」で土を運んで働きました。この工事は、毎年、旧暦で1月から4月までと6月から8月まで、つまり、田植えや稲刈りなどの期間を除いた時期におこなわれました。

村から、かりだされた人々は、冬の寒さや夏の暑さとたたかいながら、遠賀堀川の工事をほとんど手弁当（お金などをもらわないで働くこと）で続けました。

かりだされた村人は一日百人程度で、藩から連れてこられた、藩かかえの「郷夫」と呼ばれる「石工」（固い岩などを削る職人）とともに働かされました。この工事には、のべ約6万人の村人が働かされたと考えられています。

村人たちは「わたらの田んぼができるのだ」と思いながら働きました。



もっこを使い、土を運ぶ村人たち（堀川カルタより）

遠賀堀川の工事の失敗

—大膳堀はどうしてできたのか—

遠賀堀川の工事が始まって、2年目のことです。水巻の吉田村の「貴船神社」近くの「宮ノ尾」の谷間の工事にさしかかりました。

ところが、この場所は、特別な地層で、雨が降れば、どろ水が工事中の川に流れ込み、今日掘りあげた赤土が次の日には、埋まってしまうなどしました。

遠賀堀川の工事にかりだされた村人たちも疲れきっていました。

また、工事中に死んだり、ケガをしたりする人が出てきました。「貴船神社の下を掘ったので、神様のばちがあたった」「貴船神社のたたたりだ」などと村人たちは騒ぎました。

村人にとっては、1年のうち半分ちかくも遠賀堀川の工事にかりだされるうえ、死人やけが人も出てきたため、不満がたまっていました。

ちょうどその頃、藩主の黒田長政がなくなり、遠賀堀川の工事は中断されました。さらに、長政の息子忠之が2代目藩主になりましたが、堀川工事の責任者栗山大膳と意見が対立し、遠賀堀川の工事は再開されませんでした。したがって、遠賀堀川の工事は、結局中止されてしまいました。それは、1623年のことでした。

貴船神社付近の工事の跡は、水がたまり、蓮池となり、いつしか「大膳堀」と呼ばれるようになりました。今でも、「福北ゆたか線」の線路のところにその跡は残っています。また、「大膳橋」「大膳」などの地名が今も使われています。



「大膳堀」の工事の指揮をする栗山大膳
(『筑紫遺愛集』より)

享保の大ききんと村人たち

遠賀郡水巻町の下二にある水巻幼稚園の近くに「飢人地蔵」と呼ばれる供養塔（死者の供養のために作った塔）がのこされています。

その供養塔は、なぜ作られたのでしょうか？

今から、およそ300年前の1732年2月から降り始めた雨が春になってもやまず、気温が高くなるにつれ、ウンカなどの害虫が大発生し、多くの稲が枯れてしまいました。

そのため、米の収穫がほとんどなく、飢え死にする人々があとをたななかったそうです。

福岡藩では、当時の人口36万人のうち、およそ三分の一にあ



焼石に水の「お救い小屋」（『民間備荒録』を参考に作成）

たる10万人（一説には16万人）もの人が飢え死にってしまったといわれています。これを、「享保の大ききん」といいます。

この年の7月1日、遠賀郡の水巻地方では、遠賀川の洪水のため、二村の堤防が切れ、村々では、田植えができず、7月19日、ようやく、雨がやみ、田植えをしました。

しかし、ウンカなどの害虫の大発生で稲の株は残らず、枯れてしまいました。

人々は、魚、鳥、家畜、雑草などを食べつくし、中には、畳をほどいて、そのわらを煎じて飲む人もいたそうです。

当時、立屋敷村の人口126人の内、飢え死にした人は半年で、42人にものぼりました。

水巻みずまきの二村ふたには、「お救い小屋」が作られ、粥かゆが飢人うえにんに配られることになりました。

施粥せがゆ（お粥を配ること）を知らせる鐘かねの合図はで這うようにやってきた飢人が力つき、小屋の前の溝みぞを渡わたることができず、折り重なっておぼれ死んだといわれています。

その飢人のために、後日その場所に、村人むらびとによって「飢人地蔵うえにんじぞう」が建てられたのです。

今も、二股ふたまたに分かれた「なのみ」の木とこの飢人地蔵は地元の人々から大切にされています。



なをみの木と「飢人地蔵」

* JR鹿児島本線の水巻駅を下車し、中間市方面なかま（南の方角）に10分ほど歩くと、下二南しもふたのバス停があり、右手のほうに水巻幼稚園が見えてきます。幼稚園の入り口の方に曲ると左手の墓地の中に、「享保のききん」の「飢人地蔵」があります。一度たずねてみるとよいでしょう。

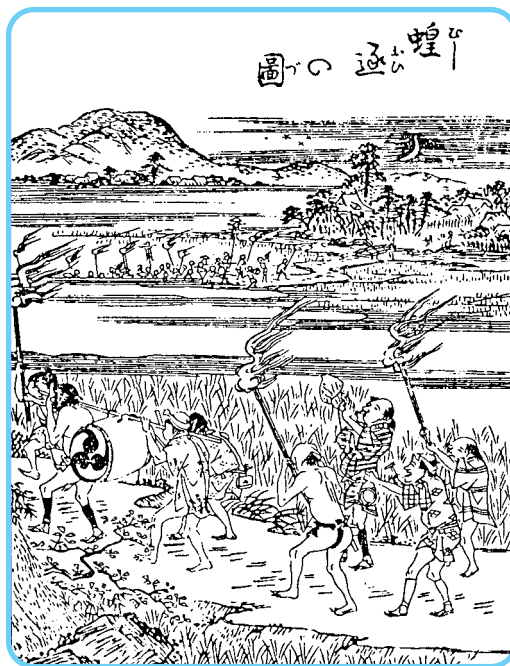
ウンカ退治と村人たち

—ウンカを退治する方法を考えだした吉右衛門—

今から300年以上も前のことです。福岡藩の農民たちは、稲作をするのに、洪水や日照りの害だけでなく、稲につく害虫にずいぶん悩まされていました。

現在とちがって、農薬などまったくなかった時代です。害虫が発生すると、夜通し松明をたいて、鐘や太鼓で追い払うしかありませんでした。これを「実盛おい」といいました。ウンカなどを簡単に駆除する方法は見つかりませんでした。したがって、時には、稲が全滅することもありました。ウンカなどの害虫が入ってしまうと、人々

はどうすることもできませんでした。ききんになってしまうこともありました。ところが、福岡藩の遠賀郡立屋敷村の藏富吉右衛門が、17世紀の中ごろにようやくウンカやイナゴなどの稲の害虫を退治するとてもすばらしい方法を考えついたのです。彼が77歳のときでした。その方法は、竹筒の中に「くじらの油」を詰め、その油を田んぼの水面にまんべんなく流します。次に稲の葉や茎についた害虫を竹ざおではらい落とします。油の上に落ちたウンカなどの害虫は、やがて死んでしまいます。この方法は、「くじらの油」のにおいも強く、なかなか普及しませんでした。「くじらの油を使うと田んぼに悪い」という噂もありました。そこで、彼は、「これは神のお告げである」と地元の農業の神である「保食宮」を利用して宣伝につとめたといわれています。福岡藩内だけではなく、その後は中国・四国地方まで、この方法はひろめられました。特に、彼の死後60年後の「享保の大ききん」では、ウンカやイナゴな



「実盛おいをする人々」大藏永常著
（『除蝗録』より）

どの害虫の駆除に大いに力を発揮したといわれています。

なお、「クジラの油」は、長崎の平戸方面より大量の取引が芦屋でなされたと伝えられています。

明治維新後、ようやく、福岡県の農会が藏富吉右衛門の功績をたたえて、銀杯をおくりました。

そして、このウンカなどの駆除法は、農薬が普及する前の1950年ごろまで、農家で行われていました。藏富吉右衛門の墓は、遠賀郡水巻町立屋敷の長専寺内の墓地の中にあります。(JR鹿児島本線の水巻駅下車、遠賀川の土手のほうに向かって15分ほど歩いたところです。)



浄土宗長専寺と藏富吉右衛門の墓

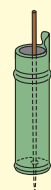


(『子どもと楽しむ福岡県歴史散歩』より)

※長専寺の山門をくぐり、まっすぐ進み左手に曲がると、右側のほうに藏富吉右衛門夫婦の墓があります。

油まき器

竹の筒の中に油を入れ、中の竹か木の針を少し上げると油が落ちて田の水面に広がる。そのあと棒で稲の葉を掃くと、ウンカが油の広がった水面に落ちて死にます。(鞍手町誌 民俗・宗教編より)



再び遠賀堀川の工事が始まった

中止されていた遠賀堀川の工事は、1708年に水巻苗代谷で試掘がおこなわれていましたが富士山の噴火のために中止になってしまいました。

享保の大ききんの後、福岡藩内の村々は、とてもひどい状態が続いていました。遠賀川付近の村々は、水田はあっても、日照りが続くと水がなくなり、また、大雨が続くと稲が水につかっくさってしまうのでした。

福岡藩は、とても苦しい藩の財政を立て直すために、藩の収入を増やそうと新田の開発を進めていきました。1737年にも、水巻苗代谷のルートで遠賀堀川の工事が再開されましたが、岩が硬く1738年には中止されてしまいました。

洞海湾周辺の干拓工事を進めてきた福岡藩では、新田開発のための農業用水の確保はとても重要で、急がれることでした。

そのため、中止されていた遠賀堀川の工事が再び始められました。

それは、1750年のことでした。遠賀堀川の工事が中止されてから128年後のことでした。

福岡藩では、今度は、「櫛橋又之進」を総司（最高責任者）として、遠賀堀川の工事を指揮することになりました。又之進は、村人の反発をおさえるために、村人たちが「貴船神社のたたりがある」とおそれていた「大膳堀」をあきらめ、一つ谷をこえた吉田村の「車返」の岩山を切り貫くことを決めました。

又之進は遠賀郡や鞍手郡の様子をよく調べてまわり、福岡藩の6代藩主「継高」に進言して、工事をすすめていったと記録されています。



遠賀堀川の工事を指揮する櫛橋又之進（河守神社の陶板の絵）

岩山に刻まれた文字

— 車返の岩山を切り貫いた石工たち —

遠賀堀川の河守神社近くの「車返」の岩の壁に「文」という文字が刻まれています。さて、なぜ、「文」という文字が刻まれたのでしょうか？

再開された遠賀堀川の工事の一番の難所は、吉田村の「車返」の岩山を切り貫く工事でした。

この岩山を切り貫く工事には、「郷夫」と呼ばれる「石工」の人たちが大活躍しました。

この「石工」たちは、福岡藩の専門職で当時の土木工事の専門家でした。遠賀堀川の工事の前にも、洞海湾沿岸の干拓工事、たとえば、「黒崎城石」の開作や「本城御開」の干拓などを進めてきた人たちでした。しかし、「車返」のとても硬い岩山をノミとツチだけで切り貫くというのは、たいへん難しい仕事でした。

硬い岩山をけずっていく工事のために、ノミやツチがすぐに丸くなってしまい、福岡から、藩士（鍛冶職：鉄を加工して物をつくる人）を呼び寄せ、修理をしながらの工事だったといわれています。

長さ405メートルの岩山を切り貫くのに9年間もかかったそうです。堀川の川幅は約6.8メートル、深さは峠の部分から川底まで20メートルもありました。また、石を切り出すときに「とひ切り」といって同じ寸法で石を切り出していく技法などもとられていました。



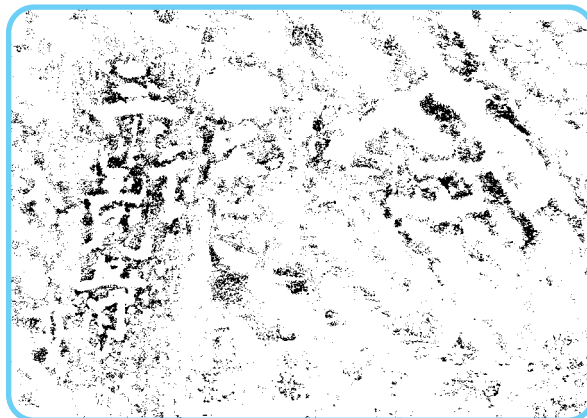
車返の工事のようす
（『筑紫遺愛集』より）



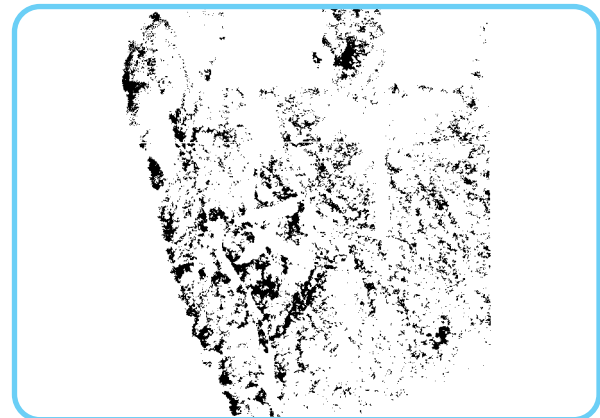
〈工事に使った道具〉
（『わたしたちのまち水巻』より）

福岡藩は工事のために、かりだされた村人の不満や反発をおさえるために、工事は急がず行い、働いた人には、お金や米をあたえました。また働きに応じて賃金を払うなどしたため、遠賀堀川工事の人气が上がり、多くの人夫があつまりました。1759年「車返」の切り貫きはようやく完成しました。

「車返」には、現在もその当時の「石工」たちが掘ったノミの跡が、硬い岩盤にはっきり残っています。また、「石工」たちが岩山に刻んだ文字も発見されています。「文」や「三尺五寸」と刻まれた文字もそういった文字の一つだと考えられています。



せんごく
線刻文字「三尺五寸」他
（『吉田車返切貫跡』より）



線刻文字「文」
（『吉田車返切貫跡』より）

遠賀堀川工事の完成

「車返」の切り貫きが完成すると、その上流と下流の工事も進められました。下流の工事は1762年に洞海湾に通じました。

上流の工事は、中間村（現在の中間市屋島公園ふきん）に水門をつくり、遠賀川の水を遠賀堀川に仮に流す作業（仮通水）にとりかかりました。

遠賀川の水の勢いが強すぎて、何度試みても水門が壊れてしまいました。

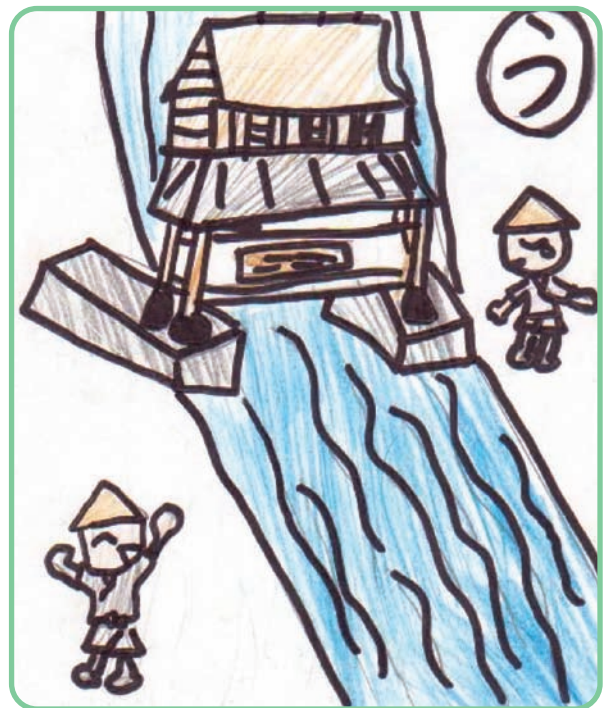
水門の度重なる失敗から、福岡藩は、底井野村出身の「久作」に備前（岡山県）の吉井川につくられていた井手と水門（石唐戸）を調査することを命令しました。その調査をもとに、1762年、中間村総社山にじょうぶな水門が完成しました。

この水門は、「中間唐戸」と呼ばれ、表戸と裏戸との二重構造になっており、洪水の時の水圧にもたえるとてもじょうぶな水門でした。この「中間唐戸」は現在も当時の場所に残っています。

ところが、中間唐戸の完成後、遠賀川の水を水門に引き入れるために、遠賀川をせきとめたりしたため、上流の地域で湿田化が起こってしまいました。そこで、遠賀堀川は上流の楠橋まで延長されました。

そこに、「寿命唐戸」がつけられました。1804年、今から約200年前のことです。

黒田長政が工事を始めてから、途中の中断を含め183年の長い歳月をかけ、楠橋村から洞海湾まで全長12.1キロメートルの遠賀堀川が一応完成したのです。



「うれしいな」と水門の完成を喜ぶ村人たち
（堀川カルタより）

水がきたぞ

—堀川が完成した日の村人たち—

遠賀郡水巻の二村の人々は、朝からそわそわしていました。
立屋敷村の人々も落ち着かない様子で、遠賀堀川の川端に集まってき
ました。

遠賀堀川の間唐戸が完成して、とうとう水が流される日がやってき
たのです。

そのときの様子を想像してみましょう。

それは、昼過ぎのことです。遠賀堀川の上流の方から村人が
「来たぞー。」

「水がきたぞー。」と大声で、叫びながら走ってきました。
土けむりを上げながら、上流から水が流れてきました。

遠賀堀川の一番下流の本城
村の人々も御開村の人々もう
れしそうな顔で声をかけあ
いました。

「これで、日照りが続いて
も、田植えができるぞ。」

「これで、米の飯が腹いっ
ぱい食えるぞ。」

「これで、もう、ひもじい
思いをしないですむんだ。」

「もう飢え死にしなくても
いいんだ。」

こうして、遠賀堀川は完成
しました。水が流れてきた日
の流域の村人たちの喜びは、
ひとしおでした。



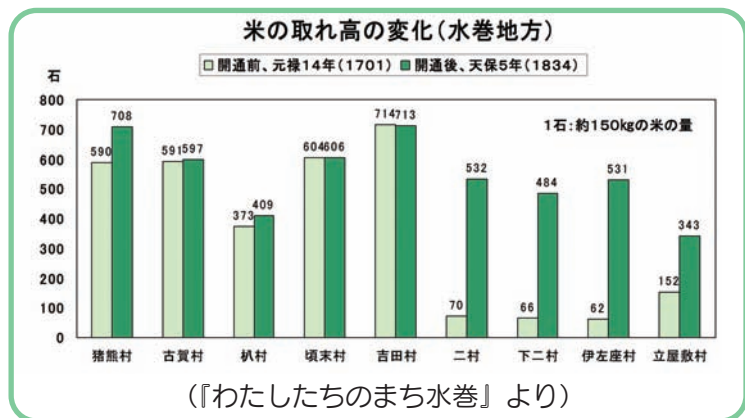
「きたぞ」と叫び、水が流れてきたのを喜ぶ村人
(堀川カルタより)

遠賀堀川が宝川になった

ー遠賀堀川と人々のくらしー

遠賀堀川が完成して、村の人々は農業用水を遠賀堀川から引くことができるようになりました。水に恵まれなかった水巻の村々や下流の新田開発でできた御開や陣原村などの村々では、米の取れ高が増えて、以前より少し楽になってきました。遠賀郡の米の取れ高は、2万石ほども増えたといわれています。

しかし、今まで、水不足を理由に年貢を免除されていた村も福岡藩に高い年貢をおさめないといけなくなりました。また、遠賀川の洪水はなくなっただけではありませんでした。ききんなども繰り返し、起こりました。



さらに、村の人々は、道路や橋・遠賀川の堤防などの修理にもかり出されました。

人々は、このようなきびしい生活を送りながらも、米を作り、遠賀堀川の水を飲み、魚をとりながら、そして、「川ひらた」の通行などで、宝を生む「宝川」となった遠賀堀川と共に少しずつ生活を高めていきました。また、遠賀堀川を守るために、「堀川筋条目」がつくられ、そのおきてを守り続けました。

そして、春と秋の二度、川さらいや藻がりをし、遠賀堀川を大切に守りながら、250年もたくましく生き抜いてきたのです。

堀川筋条目

- ・堀川の土手をかってに切って、自分の田に水を引いてはいけない。
- ・堀川の水は、食事の用意や飲み水に使う人がたくさんいるので、土手に牛や馬をつないではいけない。
- ・堀川の水は、どの村もこまらないように分け合って使うこと。
- ・堀川を通る船は、1そうにつき50文(今のお金で約1,000円)はらうこと。
- ・水門には、水番人をおき、水のちょうせつをすること。

(『わたしたちのまち水巻』より)

米や石炭を運ぶ「川ひらた」

遠賀堀川が完成すると遠賀川の上流の村々から「年貢米」や「作物」などが「川ひらた」という川船で運ばれるようになりました。

潮の満ち引きに関係なく、「品物」が若松まで運ばんでできるようになると、遠賀堀川沿いの村はとてものにぎわいました。そして遠賀堀川沿いに町並みがつくられていきました。

近世の終わり頃（1840年頃）になると、筑豊地方でほられた石炭は、この「川ひらた」に積まれ、遠賀堀川を通過して、若松へと運ばれました。多い年には、1万そうをこえる「川ひらた」が遠賀堀川を通行しました。

その頃（1891年）、運賃が安く、しかも、石炭を速く、大量に運べる鉄道「筑豊線」が開通し、また、1908年には「香月線」が開通しました。

いくら「川ひらた」でも、「蒸気機関車」による大量輸送には太刀打ちできず、その数は日増しにへっていきました。

最盛期は13万そうをこえた「川ひらた」による石炭の輸送も急激にへり、鉄道による輸送にきりかわっていったのです。

そして、1938年には、とうとう、「川ひらた」は、遠賀堀川から完全にその姿を消してしまいました。



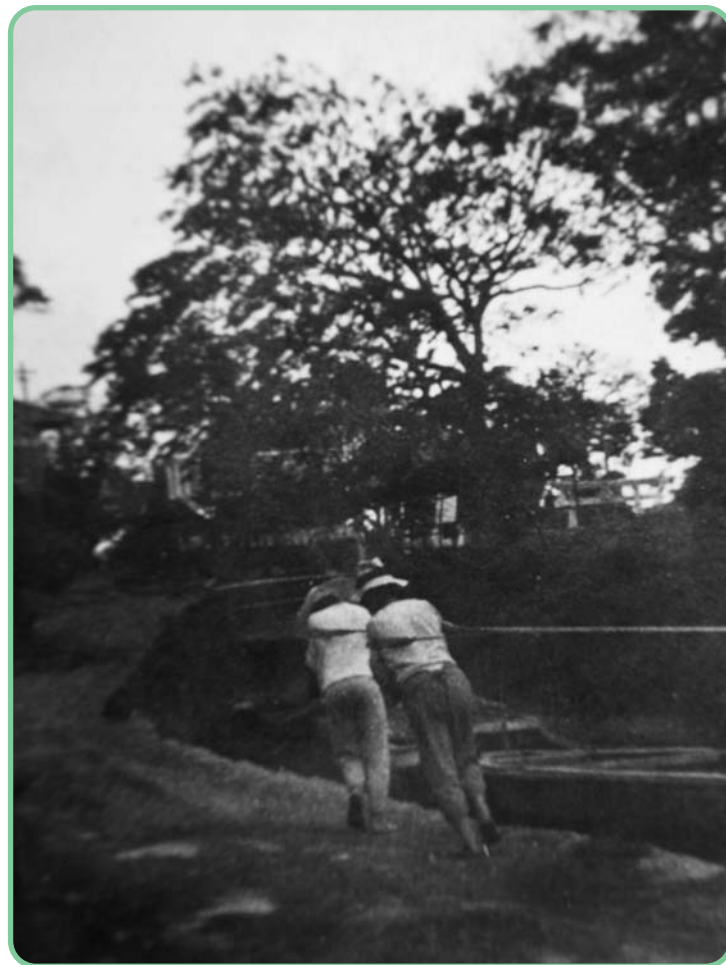
くるまがえし 車返 付近を通る川ひらた<明治後期>

川ひらたの船頭さんのくらし

ところで、「川ひらた」の船頭さんたちはどんなくらしをしていたのでしょうか。石炭を筑豊の炭鉱から洞海湾の若松港まで運ぶことで、かなり高い賃金を受け取っていたそうです。そのため、遠くは、熊本県天草からも船頭になったり、船大工になったりするために、遠賀堀川までやってきたそうです。もちろん、近くの村々からも船頭として働く人がたくさん遠賀堀川に集まって来ました。

それでは、船頭さんの仕事の仕方はどうだったのでしょうか。

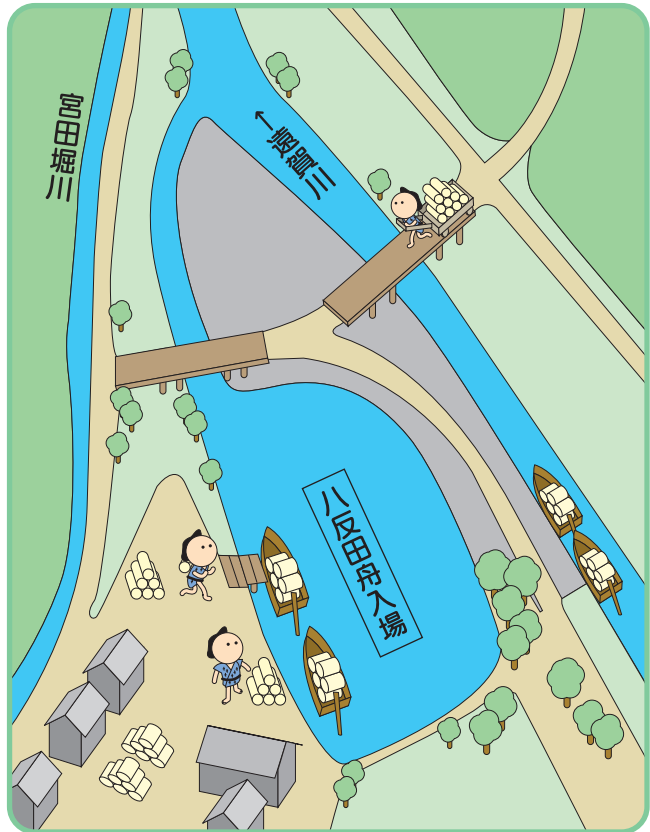
これは大変きつい仕事でした。下りはせまい川の間を岩にぶつからないように、また、行き会う船に追突しないようにしんちょうにかじ取りをしなければなりません。



なかまからと
中間唐戸付近で「川ひらた」を引く船頭たち

若松港^{わかまつ}で石炭をおろした後、上りは川の流れとは逆に船を進めていかなければなりません。船の先にロープをくくりつけ、川岸から引っぱって帰ってきたそうです。時には、腰のあたりまで水につかりながら数人がかりで「川ひらた」を引いたそうです。遠賀川上流の嘉穂郡碓井町^{かほうすい}（現在の嘉麻市^{かま}）の船着場^{ふなつきば}（八反田舟入場^{はつたんだふないりば}）から若松まで往復するのになんと一週間かかったそうです。船頭^{せんとう}さんは、船の中で食事をし、船の中で寝泊り^{ねとま}りしていたそうです。

当時の遠賀堀川沿いには、いろんな店が立ち並び、たいへんにぎわっていたそうです。旅館、酒屋、食堂、豆腐屋^{とうふ}、薬屋、呉服屋^{こふく}など、どの店も繁盛^{はんじょう}していたということです。そうやって中間唐戸^{ななかまからと}付近、中間の屋島^{やしま}付近、川端^{かわばた}付近、岩瀬^{いわせ}付近、水巻^{みずまき}の車返^{くるまがえし}付近や、折尾^{おりお}付近の堀川端の商店街が生まれたのです。



八反田舟入場：嘉麻市^{かま}上臼井^{かみうすい}（舟入場の模型が「碓井郷土館^{うすいきょうどかん}」に展示^{てんじ}されています）



折尾^{おりお}高校の中庭に保存されている「川ひらた」
長さ13メートル、幅3.42メートル

遠賀堀川の昔と今、そして未来へ

それでは、今の遠賀堀川はどのようになっているでしょうか。

完成から250年たった遠賀堀川は、水が黒くにぎり、水深もとても浅いどぶ川になってしまいました。昔、この川をたくさんの「川ひらた」が行き来していたなど、現在では、まったく想像することもできません。

昔は、米や野菜を洗ったり、飲み水に使ったり、しじみをとったりできた宝川であった遠賀堀川は、近くの家からのはい水や雨水が流れるだけの川になってしまっているのです。

「川ひらた」が通る運河としての役割が終わったあとも、遠賀堀川は、1970年頃までは、水田に水を引く用水として使われていました。

遠賀堀川流域にあった炭鉱で石炭を掘ったために起こった「鉱害」による地盤の沈下によって、河川の埋没も起こりました。

さらに、微粉炭（石炭を洗ったために出た石炭の粉）が遠賀堀川に流れ込んだため、水田に引く用水の確保がむずかしくなりました。1972年には、この用水はパイプを使っての送水に切り替わりました。

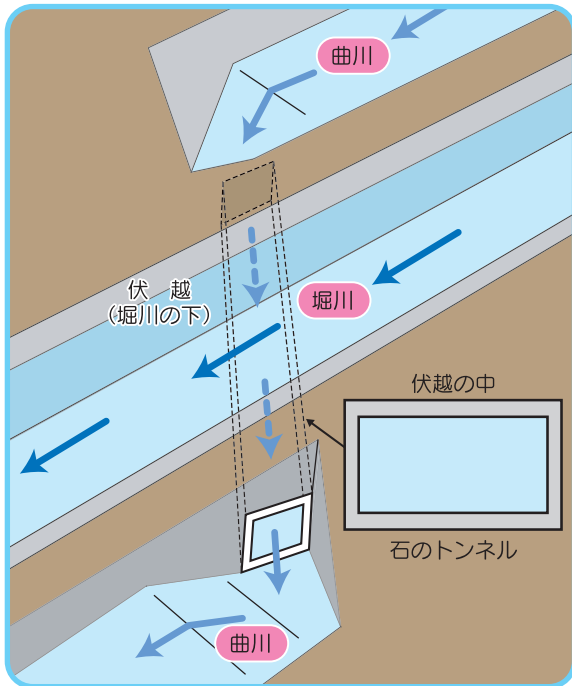
曲川の「伏越」の上流部の中間市では、水害がおこるようになり、1986年には水害を防ぐために、当時やむをえず曲川の「伏越」がとりのぞかれ、中間市の岩瀬付近で鉄板でしきることになったため、遠賀堀川の水量は、ものすごくへってしまいました。

遠賀堀川が完成してから250年、これからの遠賀堀川はどうなっていくのでしょうか。

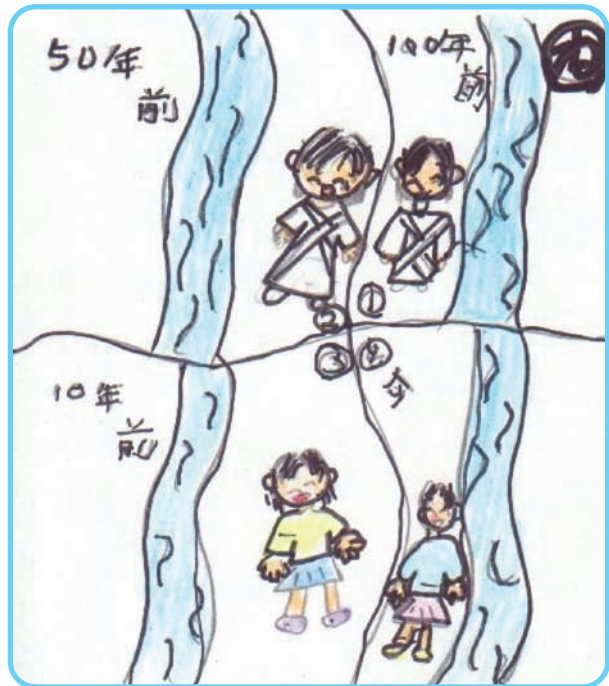
現在、一部で、たまったヘドロを取り除く改修工事が進められ、「車返」の河守神社近くに「堀川歴史公園」などが作られています。

また、遠賀堀川が昔のような魚や貝の住める美しい流れをとりもどすために、「ごみひろい」などの活動を続けている人々が数多くいます。

しかし、問題はあまりにも大きく、一部の人々の努力だけでは、簡単に解決できることではありません。遠賀堀川沿いの地域住民と「町や県や国」などの行政が力をあわせていくことが今求められているのです。



伏越（堀川と曲川）



ねがいは遠賀堀川がきれいな川にもどること
（堀川カルタより）

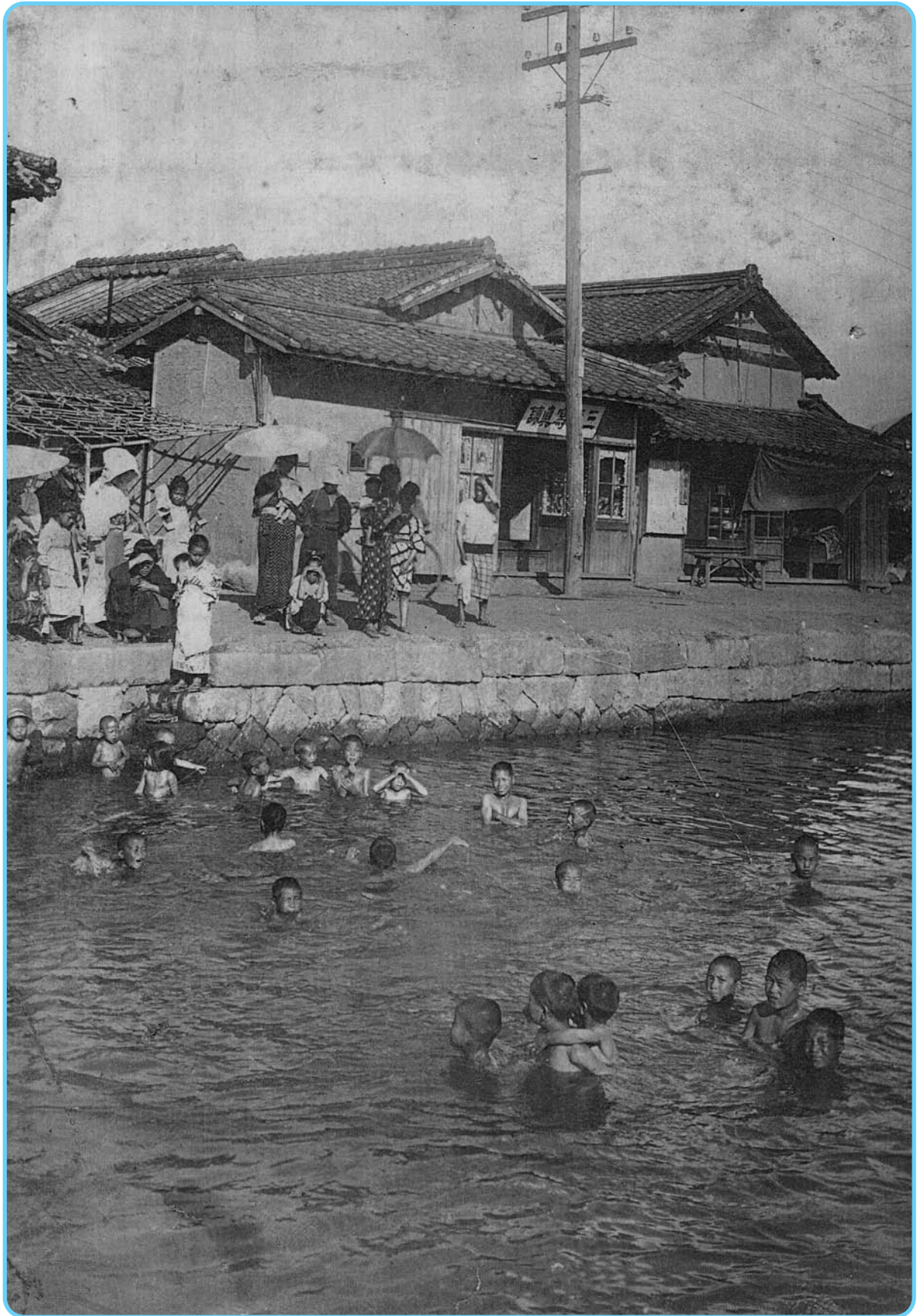
伏越

遠賀堀川が、^{まがりかわ}曲川などの自然にできた川と交差するところに「伏越」^{どぼく}（土木用語では「逆サイフォン」もしくは「^{れんつかん}連通管」と呼ばれる）を作りました。「伏越」は、堀川の下に、石組みのトンネルを作り、立体交差させ、堀川の余った水は曲川に排水できるという、とてもすぐれた構造^{そつぞう}でした。曲川の伏越はとりのぞかれましたが、現在も水巻町吉田の^{きふね}貫船橋付近の伏越は残されています。

いつか、きっと「遠賀堀川」が昔の流れをとりもどすことができることを願っています。

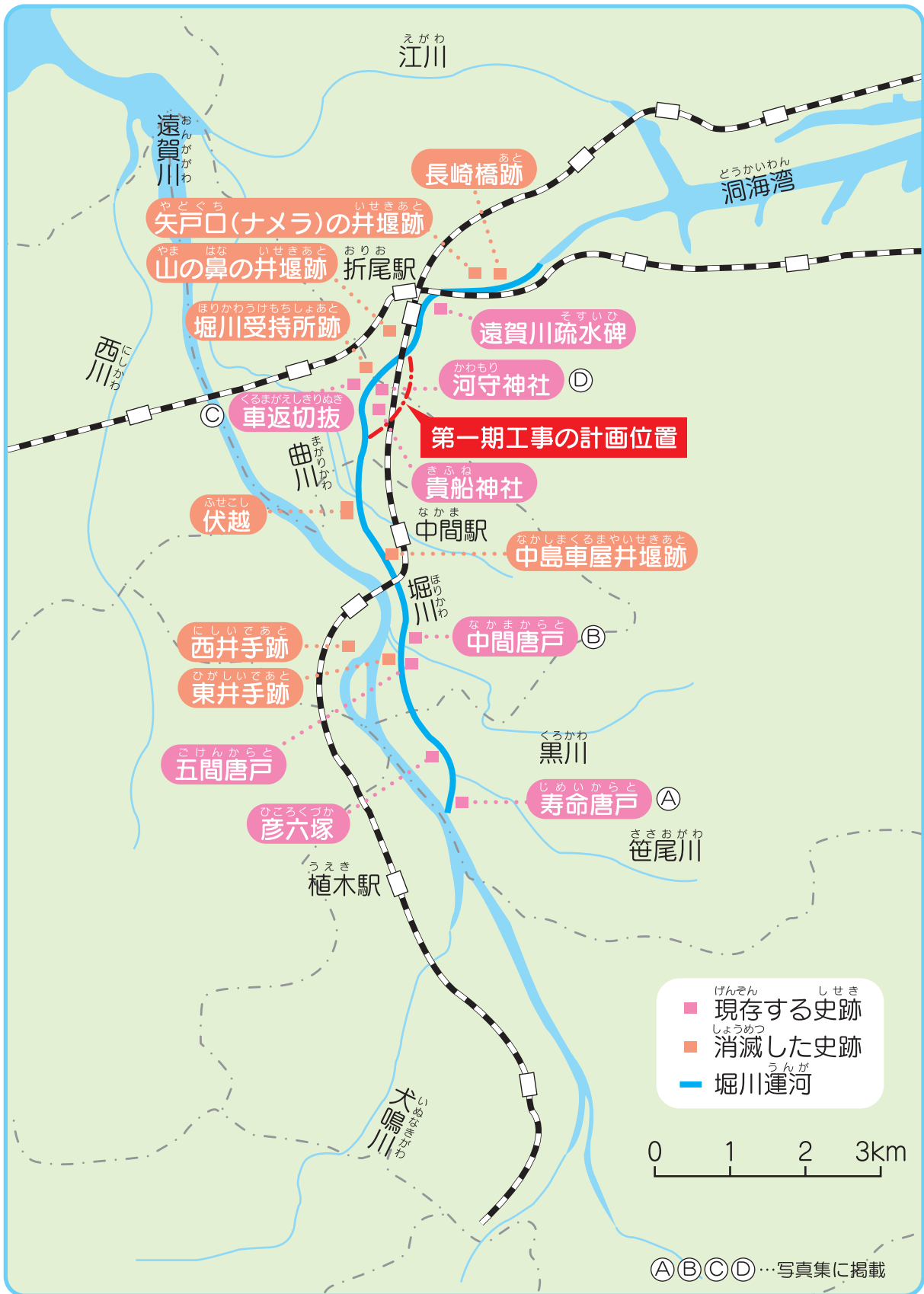
皆さんも遠賀堀川を歩いてみませんか？また、自分なりに遠賀堀川のことを調べると、もっと楽しくなると思います。

そして、遠賀堀川を昔のような川にするために自分たちができることをさがしてみましよう。



遠賀堀川で遊ぶ子どもたち<昭和10年代>
(中間市長津：現在の「働く婦人の家」付近)

堀川に関する史跡分布図 しせきぶんぷ



堀川筋条目

- 一、川内損料のため、通船壱艘につき銭五拾文あて、うけ取り候。而して切手あい渡しおき、帰り船の節は右の切手をあい改め候。指図通りに申すべきこと。
- 一、通船、夜中は切り貫き内（車返の切り貫き）をみだりに通させまじく候。ただし、よんどころなく急用でまかり通る節は、その趣きを届けて指図通り申すべきこと。
- 一、川内の普請、または水加減によって唐戸を閉鎖候節は、堀川の上下に印をあい立て申すべく候こと。
- 一、通船の数、一カ月切りに（ごとに）さし出で致すべく候こと。
- 一、土手筋の打開（開発）、蒔もの致させ申すまじく候こと。
- 一、堀川水の村々への配当は甲乙なく、裁判をいいつくべきこと。
- 一、土手筋の田地、水取りに百姓は、めいめい自由に土手を切り崩させ申しまじく候こと。但し土手を切り抜き水を取るときには、逐次、詮議して支障のないようにし、水を取らすべく申すこと。
- 一、土手筋に牛馬を繋がせ申しまじく候こと。
- 一、吹上井、樋口の魚をとり候ため、水汲み干し候儀停止のこと。
- 一、土手筋は油断なくあい回り、丈夫でないところあれば、早速、そのところを抱え村へ申し届け、その村夫をもって取り繕いの儀、いたすべく候。しかるに急場の破損などこれあり、そのところを抱え村へ申し届け、その村夫にてむつかしき手筋は、近村の夫を召し仕るべく申し候。もっとも郡夫の用立て申すべきにつき候こと。
- 一、唐戸番ならびに井手番の勤め方の儀、別紙定め書の通りあい守り候よう、重畳申すべく談じ候こと。
- 一、土手筋の定め書にあいそむき候者、見あたり候えば、親疎（親しい、親しくない）にかかわらず、名をつけ仕り候、早々あい訴べく候こと。

右の条々かたくあい守るべく候ものなり。

明和二年（1765）酉二月

市太夫

車返 久作 へ

遠賀堀川の歴史年表

西暦	元号	遠賀堀川に関するできごと	日本や世界のできごと
1617	元和3年	遠賀川大洪水	1603 江戸幕府ができる
1620	元和6年	遠賀川大洪水、初代藩主 黒田長政、栗山大膳が遠賀郡の被害視察。	
1621	元和7年	遠賀堀川第一期工事はじまる。<初代藩主 黒田長政、家老栗山大膳>	
1623	元和9年	遠賀堀川第一期工事中止。(黒田長政の死去)	1637 島原の乱
1628	寛永5年	御牧川の東流れが掘られる	1639 鎖国が完成
1708	宝永5年	川東の村々の人々から、遠賀堀川工事の再開の検討が始まる。(水巻苗代谷の試堀)	
1732	享保17年	享保の大ききん(翌年にかけて福岡藩内10万人の餓死)	1732~1733 享保の大ききん
1734	享保19年	川東12ヶ村の庄屋が水害と度重なる大ききんの実態を談合し、述べた「古来の覚書」を藩に差し出す。	
1737	元文2年	苗代谷の岩山にトンネルをくりぬく工事はじまる。<石工 岩瀬村 与一>	
1738	元文3年	難工事のため苗代谷の工事中止。「三里松原」の植え立てを開始。	
1743	寛保3年	遠賀川の本流を古賀村でふさぎ、猪熊村～島津村間の水路を本流にして、上流からまっすぐ響灘に流す工事はじまる。	
1750	寛延3年	遠賀堀川の第二期工事はじまる。<6代藩主 黒田継高、総司 榎橋又之進>	
1751	宝暦元年	正月 吉田車返の切貫の工事はじまる。	
1755	宝暦5年	梅雨時期から雨ふりやまず、国中大被害。 遠賀堀川開削に対する幕府からの正式な許可。(郷夫の数30人を90人に)	
1757	宝暦7年	車返の切貫貫通。	
1759	宝暦9年	車返の川幅を3間(5.85m)から3間半(約6.83m)に拡張される。 遠賀堀川車返の開削工事終了。	
1762	宝暦12年	遠賀堀川第二期工事完成。 遠賀堀川第三期工事はじまる。 中間村の水門工事(中間唐戸) 遠賀堀川第三期工事おわる。	1765 ワット蒸気機関を改良 1776 アメリカ独立宣言
1763	宝暦13年	遠賀堀川で「川ひらた」通航。	1789 フランス革命
1765	明和2年	遠賀堀川筋条目制定。	1782 天明の大ききん
1804	文化元年	遠賀堀川第四期工事はじまる。(1月) 寿命唐戸の水門工事 遠賀堀川第四期工事の完成(6月)	1833 天保の大ききん 1853 ペリーが浦賀に来航
1821	文政4年	吉田切貫の図作成「筑前名所図鑑」	1867 江戸幕府の滅亡
1842	天保13年	遠賀堀川を通った「川ひらた」9,648艘。	1877 西南戦争
1845	天保16年	河守神社図作成「遠鞍紀行」	1885 内閣制度ができる
1848	嘉永元年	湯原日記作成(波多野弓子)	1894 日清戦争がおこる
1891	明治24年	若松直方間に鉄道がおとる。	1901 八幡製鉄所操業開始
1899	明治32年	遠賀堀川通った「川ひらた」約13万艘。	1904 日露戦争がおこる
1938	昭和13年	鉄道の普及のために、遠賀堀川の水運おわる。	1914 第一次世界大戦おこる
1972	昭和47年	遠賀堀川の用水がパイプ送水に切り替わる。	1939 第二次世界大戦おこる
1986	昭和61年	「曲川の伏越」がとりのぞかれる。	1945 第二次世界大戦おわる
2004	平成16年	「堀川サミット」堀川開削200周年。	
2005	平成17年	車返切貫の調査で「線刻文字が見つかる」	

写 真 集

< 遠賀堀川関連写真 >

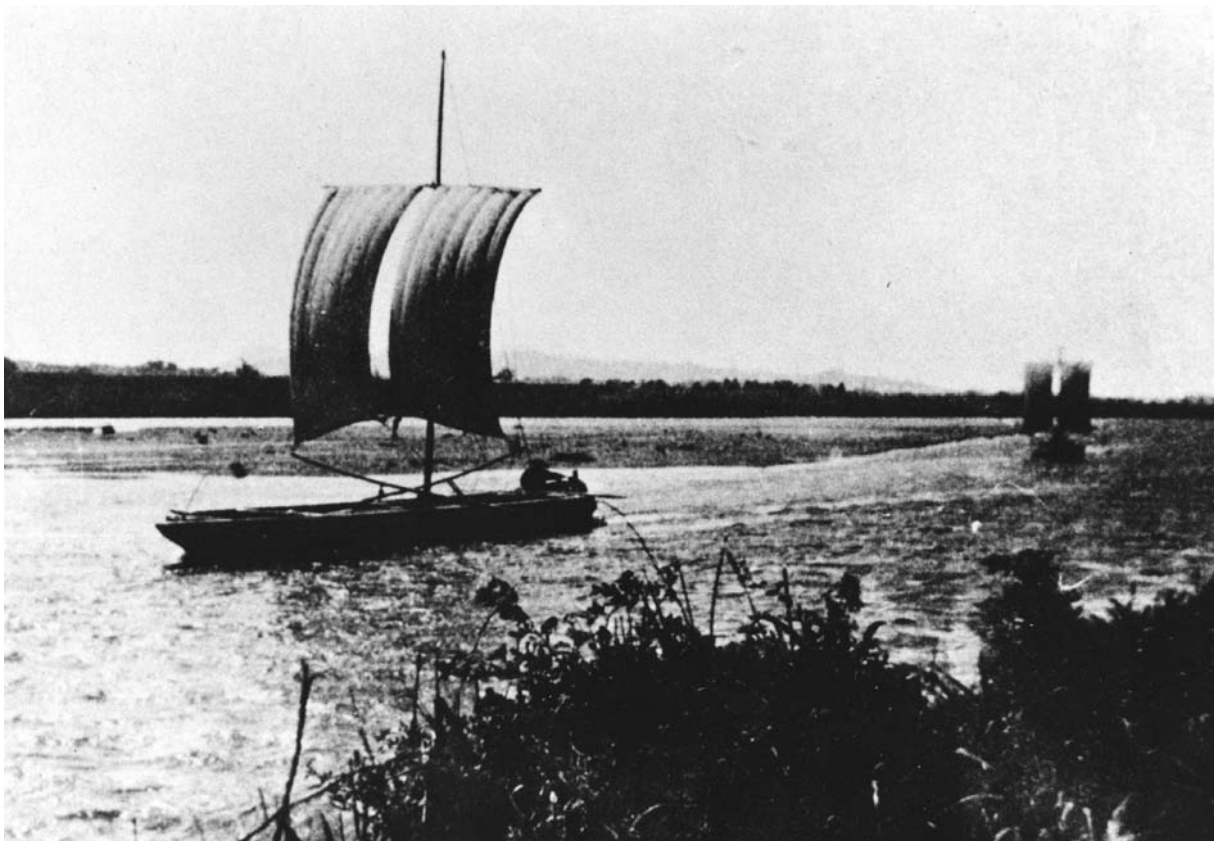
< 遠賀堀川に関する学習風景 >

< 遠賀堀川をきれいにするために行われている活動 >

● 遠賀堀川関連写真



遠賀川の川ひらた（木屋瀬付近）〈明治後期〉

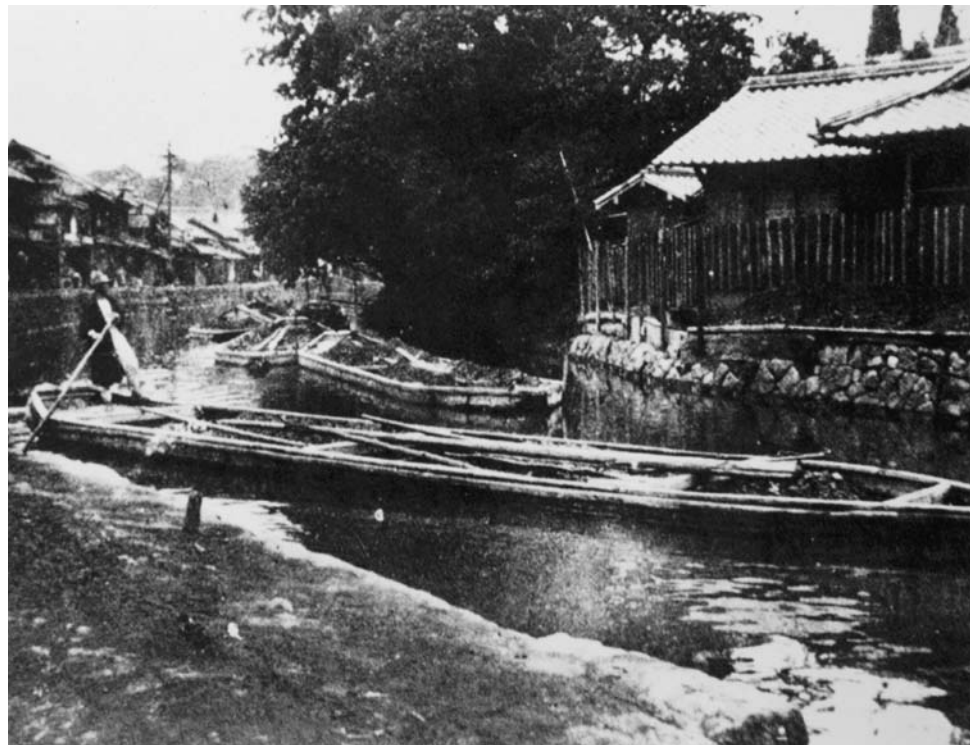


遠賀川の川ひらた

長津村中問唐戸通舟景



㊦ 中間唐戸付近の川ひらた<明治後期>



㊦ 中間唐戸付近の遠賀堀川を進む川ひらた<明治後期>

● 遠賀堀川関連写真



㊤ 寿命唐戸付近の川ひらた<明治後期>



㊤ 車返をくだる川船船頭<明治後期>



本陣橋（八幡西区陣原）をくだる川ひらた<明治後期>



遠賀橋（中間市）から見た遠賀川<昭和期>

● 遠賀堀川関連写真



㊤ 寿命唐戸(平成19年12月)



© 中間唐戸(平成19年12月)

● 遠賀堀川関連写真



遠賀堀川：中間市岩瀬付近(平成19年12月)



© 河守神社：遠賀郡水巻町吉田(平成19年12月)



遠賀堀川：遠賀郡水巻町吉田(平成19年12月)

● 遠賀堀川関連写真



© 遠賀堀川：北九州市八幡西区大膳(平成19年12月)



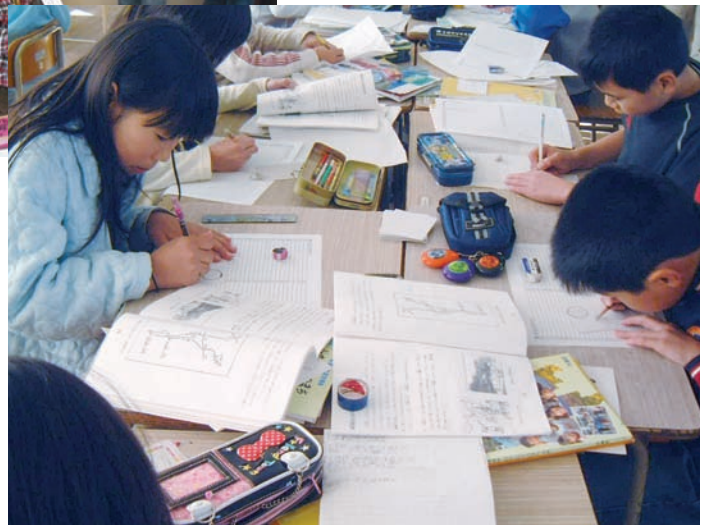
川ひらた（芦屋町中央公民館）：遠賀郡芦屋町中ノ浜(平成20年2月)

長さ13.8メートル、幅2.46メートル

● 遠賀堀川に関する学習風景



遠賀堀川工事の劇を行う子どもたち



堀川カルタをつくる子どもたち



堀川カルタであそぶ子どもたち

※堀川カルタ…遠賀堀川の学習をもとにカルタを作成しました。

● 遠賀堀川に関する学習風景



歴史資料館で学習する子どもたち





遠賀堀川を見学する子どもたち



● 遠賀堀川をきれいにするために行われている活動



遠賀堀川の清掃を行う子どもたち



遠賀堀川の浄化を願って
EMどろだんごをつくる子どもたち



遠賀堀川の浄化を願って
EMどろだんごを
遠賀堀川へ投入する子どもたち

遠賀堀川の浄化を願って
EM発酵液を遠賀堀川へ散布



※EM（有用微生物群）

有機物（有害物質も含む）を発酵させ、役に立つ物質を生成し、またその環境を浄化する力を持っている微生物の集まり。一般的に善玉菌といわれる。

参考文献（参考にした本や史料）

- 「水巻町誌」 水巻町郷土誌編集委員会
- 「増補水巻町誌」 水巻町誌編纂委員会
- 「水巻おもいでの写真集」 水巻町企画課
- 中間市「広報」市史閑話 中間市役所総務部総務課広報統計係
(No.31、No.32、No.33、No.34)
- 「堀川の歴史と文化」 中間市歴史民俗資料館
- 「堀川の歴史と文化」 中間市歴史民俗資料館
(中間市歴史民俗資料館 一周年記念特別展)
- 「堀川散歩マップ」 みんなで創るふるさと会
- 「中間市史」上巻・中巻 中間市史編纂委員会
- 「堀川工事の史実」 中間郷土史会
- 「遠賀『堀川』の歴史」 中間市歴史民俗資料館
- 「堀川再発見」 福岡県立折尾高等学校
- 「遠賀ほりかわ物語」 水巻町歴史資料館
(平成18年度 企画展)
- 「堀川200 堀川開削二百年記念事業報告」 堀川まちおこし実行委員会
- 「堀川まちおこし事業報告書 ウラカタヴォイス」 堀川まちおこし実行委員会
- 「堀川まちおこし事業報告書 2006」 堀川まちおこし実行委員会
- 「吉田車返切貫跡」 水巻町教育委員会
- 「わたしたちのまち水巻」 「わたしたちのまち水巻」編纂委員会
- 「子どもと楽しむ福岡県歴史散歩」 福岡県歴史教育者協議会
- 「子どもと楽しむ福岡県歴史資料集第1集」 福岡県歴史教育者協議会
- 「子どもとつむぐ社会科教育実践集」 福岡県教育総研
- 「遠賀川、もっと知りたい遠賀川」 NPO法人遠賀川流域住民の会
- 「堀川カルタ」 水巻町立伊左座小学校
- 「堀川の教材化に向けて」 齊藤勝明
- 「堀川の話」 齊藤勝明
- 「宝川と呼ばれた川」 齊藤勝明
- 「堀川の歴史」 太田博敏
- 「水巻の昔ばなし」 柴田貞志
- 「遠賀堀川」 小川 賢
- 「堀川の流れに」 板井涼一
- 「筑前遠賀郡堀川開鑿史談」 夏秋 茂
- 遠賀堀川関連写真 水巻町教育委員会、中間市教育委員会、
芦屋町教育委員会
- 学習風景写真 水巻町教育委員会
- 遠賀堀川清掃活動写真 堀川再生の会・五平太

■編集部員

齊藤 勝明 (水巻町立 伊左座小学校)
太田 博敏 (遠賀町立 島門小学校)
大坪 剛 (水巻町 歴史資料館)
濱田 学 (中間市 教育委員会)
中村 恭子 (堀川再生の会・五平太)
武井 修 (福岡県北九州土木事務所)
竹平 洋幸 (福岡県北九州土木事務所)
中司 哲夫 (遠賀川河川事務所 河口堰管理支所)
古賀 哲郎 (遠賀川河川事務所 河口堰管理支所)

国土交通省 遠賀川河川事務所

〒822-0013 福岡県直方市溝掘1丁目1-1
TEL 0949-22-1830 FAX 0949-22-2859

事務局：河口堰管理支所

〒807-0001 福岡県遠賀郡水巻町大字猪熊10-7-1
TEL 093-201-1675 FAX 093-201-1676

